

平成二十七年聖ドミニコ学園中学校入学試験（第一回）

# 国語

◎ 次の注意事項を読んでください。

- 1 試験開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 2 問題はぜんぶで8ページあります。
- 3 解答用紙は問題用紙にはさんであります。
- 4 解答用紙に受験番号、氏名を書いてください。
- 5 答えはすべて解答用紙に書いてください。
- 6 字数は、句読点や「」をすべて一字に数えます。

□ 1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

同じ語学である英語と国語とについて考えてみましょう。英語は外国語ですから、勉強の上で大きな① **コンナン**が伴います。そうして、油断していいかげんなやり方をしていたら、しまいにはついていけなくなります。そうなった時、いくらあがいてみても浮かび上がるのがむずかしいことを、学習者自身が覚悟してあります。予習にも **X**②習にも、十分すぎる程の時間をかけて勉強します。そこまで時間をかけ努力をしても、なかなか満点はとれません。しかし、満点がとれなくても力はついていきます。力のつき具合が目に見えて**励み**にもなります。

**a** 国語はどうでしょう。英語は本格的に学ぶのが中学一年からでしょうが、国語は小学校一年——というよりは、生まれた時からずっと学習しつづけています。今さら何を勉強する必要があるのかという気にもなるでしょう。③ **格別**、学校でややこしい勉強をしなくても、日常生活に不自由を感じることはありません。④ **b** 現代生活と何の関係もない古文や漢文を、何の**インガ**で勉強しなければならぬのかと、嘆きたくなるのももつとです。

□ 1 ことばというものが、**A** 日常生活に事欠きさえしなければよいのなら、国語の勉強など、もはや必要ありません。実は外国語の勉強といえども、それ程の苦労はいらないのです。日本にいて英語を学ぼうとするからむずかしいので、イギリスかアメリカへ生活の場を移せば、英語など **B** お茶の子さいさいで覚えられます。

私の姪の一家はアメリカに住んでいたことがあります。姪の夫が化学者で、研究のための留学を命ぜられたからです。二歳になった

ばかりの姪の娘と二人で行ったのですが、それほど英語が④ **達者**だとも思えなかった姪が、アメリカへ行ったらお茶やお花を教えてアルバイトするのだと、それまで習っていたお茶とお花に熱中して、師範免状を取って行きました。その時の **C** 英語のうまさは、姪の夫、姪、姪の娘の順であったに決まっています。□ 2

ところが、渡米後一年たってみるとどうなったでしょう。姪は化学を勉強して大学教授の秘書をつとめ、アパートでの奥さん同士のつき合いから英語もペラペラになり、一時間くらいの長電話でも平気だといえます。

姪の娘は保育所に通ってきれいな英語が話せるようになって、おとうさん(姪の夫)の発音を直すありさま。おとうさんの方は、研究室員四名のうち三名までが日本人なので、ついつい日本語に頼ってしまい、英語は一向に上達せず、**D** 渡米当時の順位に大番狂わせが生じてしまったそうです。□ 3

私たちの生活、精神生活も⑤ **ブツツ**生活も、国語がなければ成り立ちません。ですから、国語は私たちの生活そのものだといえましょう。私たちが考えたり感じたり、見たり聞いたりしたことを、他の人に伝えたり、自分でも覚えておこうとする時、国語がなければ絶対にできません。□ 怒哀樂の情の動きも、国語によって⑥ **シハイ**されています。□ 4 **E** ウレシイ、ニクラシイ、カナシイ、タノシイ——こういう感情は国語で感じ取っているのです。

道歩いていて、何気なく目につる家も人も車も、或いは山や川や空も、それらを、家、人、車、**c** 山、川、空と意識するのは、国語を通じてなされていることに気づくでしょう。

世界中の人間が、ことばを生活に⑦ **ミツチャク**させて今に伝えています。民族や⑧ **チイキ**によって、考え方も生活のしかたも違っています。

うに、ことばも **Z** 千差**□**別です。日本人は遙かに遠い **⑨** ソ**セ**ンの時代から、日本語と共にその歴史を過ごしてきています。日本語の中にこそ日本人のすべてがあつたと言えるのです。 **□** **d** 私たちの国語を **⑩** 尊重そんじゆうすることは、自らの歴史を尊重し、自らの生活に誇りほこを持つことであると言えます。 **F** 日本語を **□** 視したり、その勉強を **□** 視したりすることは、自ら卑下ひげすることになります。 **⑤**

日本人としての誇りほこは、国語を尊重することによって得られるのです。

(橋本武『橋本式国語勉強法』による。)

問一 〓線 ①「コンナン」、②「格別」、③「インガ」、④「達者」、⑤「ブツシツ」、⑥「シハイ」、⑦「ミツチャク」、⑧「チイキ」、⑨「ソセン」、⑩「尊重」、のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問二 **□** **a** **□** **d** に入る語として、最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい (同じ記号をくり返し使うことはできません)。

ア ところが イ 或いは ウ ましてや エ 従つて

問三 〓線 X 「□習」、Y 「□怒哀楽」、Z 「千差□別」の空欄に入る、適当な漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問四 〓線 A 「日常生活に事欠きさえしなければよい」とありますが、「日常生活に事欠く」とほぼ同じ内容の表現を文中から12字でぬき出して答えなさい。

問五 〓線 B 「お茶の子さいさいで」を、意味を変えずに別の表現で言いかえなさい。

問六 〓線 C 「英語のうまさ」とありますがどういう意味ですか。文中から10字以内でぬき出して、解答欄の「こと。」につながるように答えなさい。

問七 〓線 D 「渡米当時の順位に大番狂わせが生じた」とありますが、その理由を30字以上45字以内で説明しなさい。

問八 〓線 E 「ウレシイ、ニクラシイ、カナシイ、タノシイ」とありますが、この仲間にはまらない語を二つ選び、記号で答えなさい。

ア おそろしい イ つよい ウ はらだたい  
エ おおきい オ せまい

問九 〓線 F 「日本語を□視したり、その勉強を□視したり」とありますが、それぞれの空欄に入る漢字の組み合わせとして適当なものはどれか、一つ選び記号で答えなさい。

ア 敵・蔑 イ 重・軽 ウ 軽・重 エ 無・軽

問十 次の一文を入れる所として最も適当なのは、**□** **1** **□** **5** の中のどこですか。1～5の数字で一つ答えなさい。

**□** それは堪えがたいことです。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学三年生の勇翔は、地元のサッカーチームに所属しているが、運動が苦手でなかなか試合に出してもらえない。父親の拓也は、勇翔のサッカーへの取り組み方には必死さが感じられない、と不満に思っている。拓也は、勇翔がやる気を出すようになることを期待して、Jリーグ小学生チームへの入団テスト「セレクション」の受験を勧めた。セレクション当日、母・聡子と姉・恵里も一緒に見守る中、五対五のミニゲーム形式でのテストが始まろうとしている。以下は、その続きの場面である。

拓也はゴクリと唾を呑み込んだ。遂に勇翔の実力が試されるときがきた。

(注1)ピッチにチームカラーの(注2)ビブスを身につけた子供たちが入ってくる。事前に話し合ったようで、それぞれが自分のポジションへついた。

—— なんてだよ。

拓也は腕を組んだままピッチをにらんだ。

(注3)オレンジの10番は、自陣ゴール前に下がっている。

—— やりたいのは、(注4)フオワードじゃなかったのか？

キックオフの笛が鳴り、オレンジとブルーのビブスが入り乱れる。

① 前線にいる子は、相手につかみかからん勢いだ。勇翔はと見れば、チュウジツな番犬さながら、ゴール前でお座りするかのようになれを見ている。ゲームに積極的に参加していく気配はない。先日

② カンセンした(注5)バンビーノの練習試合での姿と重なった。

味方ボールになると、勇翔は「ハイ、ハイ」と声を出し、手を挙げ

げる。しかしここは教室ではなくピッチの上だ。手を挙げて、指してくれる先生はいない。パスは順番待ちではもらえない。いくら後ろで呼んでも、ボールは回ってこない。

三年生とはいえ、子供たちの嗅覚は敏感で、戦える仲間をすぐに嗅ぎ分けたようだ。勇翔はほとんどA蚊帳の外といった感じだ。

胸のなかにもやもやとした霧が立ちこめはじめ。唇を噛みしめ、あるいは歯噛みした。思わず舌を打ち、ため息を漏らす。天を仰ぎ、うつむく。

そして、タイムアップの笛が鳴った。

その後のゲームでも③大差なかった。勇翔は後ろにポジションをとり、味方ボールになると手を挙げて呼んだが、ボールには、ほとんどさわれない。一度だけゴール前で敵のドリブルを阻止して、止まったボールを前に蹴った。そのボールが味方につながって、ドリブルで抜け出したオレンジの5番がゴールを決めた。

「やったね！」

聡子がはしゃいだ。

「アシスト決めたの？」

恵里も喜んだ。

それが勇翔のこの日最大の見せ場だった気がする。

拓也としても一緒に喜びたいところだったが、解説してやった。

「今のは勇翔が④意図して出したパスじゃない。前に蹴っ飛ばしたら、たまたま味方ボールになったただだよ。あれじゃ、評価されない」

笛が鳴り、各チーム三本ずつのゲームを終え、勇翔は10番のビブスを脱いだ。セレクションの一次は終了。子供たちは解散となった。

「行こう」

拓也はジーンズのポケットに両手を突っ込んで歩き出した。聡子と恵里がついてきた。

「わかっていたことじゃないか。」

拓也は苛立つ自分の胸に語りかけた。

B——勇翔に少しでも光るものはなかったか？

考えてみる。

——ないな、

と思う。

現状ではない。悲しいけれど、それが現実だった。

待ち合わせ場所にやってきた勇翔が合流し、家族四人で隣にある芝生広場のほうへ歩いて行った。ほかの親子の姿もあった。⑤興奮気味にミニゲームの話を母親に語りかける子供もいた。

拓也はなにも言わず広場の一番奥まで進み、X足を止めた。

そこまで歩いてくる親子はいなかった。聡子がレジャーシートを敷いて、お昼の⑥ジュンビをはじめた。時計を見ると、もうすぐ十二時になるうとしている。

「どうだった？」

レジャーシートにあぐらをかいた拓也が声をかけた。

勇翔は立ったまま、「うん……」と言ったきり黙り込んだ。

「さあ、ご飯にしようよ」

用意した弁当を聡子がひろげはじめた。

「ちよっと待って」

拓也は右手で⑦セイシして、もう一度問いかけた。「セレクシオン、どうだった？」

うつむいた勇翔は少し間を置いてから、「Yボールが来なかった」とこたえた。

「そうだったな。どうしてだか、わかるか？」

「みんな自分でゴールを決めたいから」

「たしかにな。自分をアピールするには、ゴールが一番手っとり早い。合格するために、みんな必死だ。おまえはどうだった？ 自分の力を出せたか？」

「——うん」

小さくうなずいて唇を結んだ。

「おまえとしてはどう思う？ 一次セレクション、合格したと思うか？」

勇翔は口をすぼめて考え込んでから、「うん、たぶん……」と言った。

「たぶん、なんだよ？」

「一次は受かっていると思う」

勇翔はからだをねじりながらこたえた。

「そうか、そうなのか……」

拓也は低い声を漏らした。今ここで言うべきか、それともセレクションの結果がわかってから家に帰って話すべきか、迷った。

「お前、本当にそう思っているのか？」

気持ち静めて訊いてみた。

C勇翔の目がうつろに泳いだ。

「父さんな、おまえは駄目だと思うよ」

拓也はZ今言うべきだと思い、口に出した。

「え？」

「おまえは一次セレクションには受からない。絶対にな」

強い調子で断言した。

「ねえ、パパ……」

なだめるように聡子が口を挟んだ。

勇翔は唇をとがらせるようにした。

「だったら、見てこい」

「え？」

「十二時に、受付した場所に結果が張り出される。おまえの番号132があるかどうか、見てきなさい」

静かな⑧口調で告げた。

「——わかった」

「じゃあ、ママもついていくよ」

聡子が言うと、「私も」と恵里が立ち上がるとした。

「ゆうと！」

拓也は声を高くした。「ひとりで行けるよな」

「はい」

勇翔はくりりと背中を向け、芝生の広場を歩き出した。その小さな背中を三人で見送った。

「お弁当、どうする？」

「待つてあげよう」

拓也が言うと、恵里がうなずき、弁当箱の蓋をすべて閉じた。

「勇翔なりに、がんばってただけだなあ」

聡子が悔しそうにつぶやいた。

十分ほどたって、勇翔が広場にもどってきた。

しよんぼりとしたその姿を見れば、結果は一目瞭然だった。うつむいたまま、まっすぐに芝生の上を歩いてくる。⑨ウチガワから

舌で押すようにして、ほっぺたをふくらませていた。

三人は座ったまま勇翔を待った。レジャーシートの前で立ち止まった勇翔は、右腕を上げ、目の高さで横に拭った。

「なかった」

D 勇翔は何度も目をしよぼつかせた。

「そうか」

拓也はうなずき、「じゃあ、お昼にしよう」と言った。

聡子と恵里が弁当箱の蓋を開いた。早起きしてつくったお弁当は、運動会のとくと同じように彩りよく、にぎやかだった。鶏の唐揚げ、卵焼き、プチトマト、茹でブロッコリー、ウインナーのタコ、勇翔の好きな車エビのベーコン巻きもちゃんとおった。

「さあ、ママがせっかくなつくつくってくれたお弁当だ。みんなで食べよう」

「うん、食べよ」

恵里がやさしい声で相槌を打った。

「そうだね、ママもお腹減っちゃったよ」

聡子が水筒のふたにお茶を注ぎ、恵里がおにぎりを勇翔に手渡した。勇翔はおにぎりを手にしたまま突っ立っていた。

「どうした、座れよ」

拓也が声をかけた途端、勇翔はしゃくり上げ、「ぼく、ぼく……」と繰り返した。

「どうした？」

「うつ、うつ……」

嗚咽で言葉がつかえず、肩が震えた。過呼吸にでもなりはしないかと、心配になるほどに。

「E ぼく、ほんとに、わかってた。……だけど、言えませんでした」胸を波打たせながら勇翔は言葉をしぼり出した。「最初から、あ

きらめちやいけない、そう思って、嘘をつきました」

涙が糸を引いて垂れ、涙が赤い頬を伝った。

「そうか。駄目だって、自分でもわかってたんだな」

「はい」

勇翔はシューズを脱ぎ、レジャーシートに正座した。

鶏の唐揚げを包んだ銀紙が冬の太陽を⑩ハンシヤさせ、きら

きらと光った。少し離れた場所ですり足音を蹴りはじめた親子の笑い声が、風に運ばれてきた。勇翔のかさついた膝に涙が落ちてはじけた。

「いいか、勇翔」

拓也は言葉を選びながら続けた。「F父さんはここへ来る前から、

ほんとはわかってたよ。おまえの力では通用しないことは。今日ここに集まったのは、おまえと同じようにプロのサッカー選手になる夢を持つて三年生だ。みんな上手だったな。それに、すごく真剣だった。父さんは勇翔に感じてもらいたかったんだ。おまえと同じ夢を持った子たちが、今どの辺を歩いているのか。自分が、どのあたりを歩いているのか」

「はい」

「勇翔、認めるよ。おまえは、へたくそだよ」

拓也が言うと、勇翔は顔を空に向け、声を上げて泣き出した。

「おまえは、今日ここへ集まった三年生のなかで、たぶん一番へただ。参加すること自体、無茶だったかもな。でもな、勇翔。それは今日であり、今の時点だ。これからがんばれば、追いつけるかもしれない。だからここへ来たのは、父さんは無駄だとは思っていない。それがわかっただけでも来た甲斐はあった。ただ、続けるかどうかは、おまえ次第だ」

拓也は勇翔の目を見た。「サッカー選手になる夢をあきらめるなら、それでいい。無理だと思ったら、またべつな夢を見つけろ」

「やだっ」

勇翔は激しく首を横に振り、叫んだ。「やりたい！」

「でも、それって大変だぞ。今日ここへ来てわかっただろ。上には

上がいるんだ」

「うん。でも、あきらめない」

「どうして？」

「サッカーが、……好き、……だから」

勇翔はしゃくり上げ、言葉が切れ切れになった。

もうこれ以上責めたくはなかった。

「じゃあ、これだけは聞かせてくれ。おまえは本気でサッカーをやるのか？ それとも遊びでサッカーをやるのか？ 本気でやるなら、父さんは協力する。遊びでやるなら、もうなにも言わない」

「本気で、……やります」

勇翔はまっすぐに拓也を見た。

「本当か？」

「強くうなずく。」

「本当に本当に、そうなんだな？」

「ハイ」

「よし」

拓也は息を吐くと言った。「今日この場所へ来たことを忘れるな。ピッチに立ちながら、何もできなかった自分を忘れるな。この場所で味わった悔しさを絶対に忘れるな。——いいか、おまえのサッカーは、ここからはじまるんだ」

拓也は手にしたおにぎりをほおぼった。梅干しがやけにしよっぱかった。

勇翔はうなずき、同じように大きな口を開けておにぎりをほおぼった。

その姿を見た拓也は、鼻の奥に痛みを感じながら、遠くに目をや

つた。**3** 冬枯れた芝生のところどころに、緑の新芽が顔を出しはじめていた。陽気に誘われたのか、小さな薄紫色の蝶が一匹、ちらちらと頼りなげに低く飛んでいく。ボールを蹴る親子の姿が、不意にぼやけた。

「勇翔ががんばるなら、ママも応援する。サッカーのことは、よくわからないけど」

聡子の言葉に、勇翔はコクリと首を振った。

G 恵里は黙って、爪楊枝に刺さった車エビのベーコン巻きを弟に差し出した。

「いいか、勇翔。おまえのサッカーは、ここからはじまるんだ」  
拓也はもう一度くりかえした。**4**

(はらだみずき『ここからはじまる』による。)

注1 ピッチ——サッカーの試合を行うための競技場。

2 ビブス——ゼッケンのこと。敵と味方を見分けるために色分けされ、選手ごとに番号が書かれている。

3 オレンジの10番——勇翔が身につけているビブスの色と番号。

4 フォワード——相手ゴールの近くで攻撃の中心となるポジション。以前、勇翔は拓也に「フォワードをやりたい」と言っていた。

5 バンビーノ——勇翔が所属しているサッカーチームの名前。

問一 〓線①「チュウジツ」、②「カンセン」、③「大差」、

④「意図」、⑤「興奮」、⑥「ジュンビ」、⑦「セイシ」、  
⑧「口調」、⑨「ウチガワ」、⑩「ハンシヤ」のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問二 〓線A「蚊帳の外」の本文中の意味として、最も適当なものを次から一つ選び記号で答えなさい。

ア きらわれること   イ 頼りにされること  
ウ 無視されること   エ ばかにされること

問三 〓線B「——勇翔に少しでも光るものはなかったか？考えてみる。——ないな」とありますが、拓也がそう考えた理由として、最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア パスをもらうために手を挙げて、チームメイトにきらわれた勇翔は、パスがもらえなかったから。

イ ゲームに積極的に参加して、こうという姿勢が、勇翔のプレーからは見えなかったから。

ウ 勇翔が意図して出したパスが味方ボールになったということだけが、今の勇翔の精一杯の実力だから。

エ 大した活躍をしなかったにもかかわらず、一次試験は合格している勇翔が言ったから。

問四 空欄 X、Y、Z に入る語として、最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい（同じ記号をくり返し使うことはできません）。

- ア だから      イ やはり      ウ なかなか  
エ ようやく      オ つまり

問五 線 C 「勇翔の目がうつろに泳いだ」とありますが、この時の勇翔の気持ちとして最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 意外なことを言われて驚いている。  
イ 失礼なことを言われて怒っている。  
ウ 父親に疑われたので悲しんでいる。  
エ 嘘をついているので動揺している。

問六 線 D 「勇翔は何度も目をしょぼつかせた」とありますが、この時の勇翔は、どうすることをがまんしていたのか答えなさい。

問七 線 E 「ぼく、ほんとは、わかってた。……だけど、言えませんでした」とありますが、勇翔が言えなかったのはどういうことですか。20字以内で説明しなさい。

問八 線 F 「父さんはここへ来る前から、ほんとはわかってたよ。おまえの力では通用しないことは」とありますが、勇翔

の力が通用しないことを分かった上でセクションを受験させた拓也の考えに、あなたは賛成ですか、それとも反対ですか。次の文章の書き方を守った上で、あなたの考えを30字以上60字以内で説明しなさい。

- ・賛成の場合 「私は賛成です。なぜなら、～からです。」
- ・反対の場合 「私は反対です。なぜなら、～からです。」

問九 線 G 「恵里は黙って、爪楊枝に刺さった車エビのベークン巻きを弟に差し出した」とありますが、このとき恵里は心の中で、勇翔に向かってどんなことを言っていたと思いますか。恵里のせりふを想像して、10字以内で答えなさい。ただし、答えに「」（かぎっこ）をつける必要はありません。

問十 次の一文を入れる所として最も適当なのは、  
の中のどこですか。1～4の数字で一つ答えなさい。

でも、たしかめておきたかった。

1  
2  
3  
4

